

2019年の初めに、最先端の科学技術を支える「こころ」について考えてみよう！

谷川大輔（建築学科）

2019年1月1日元旦の朝日新聞の「天声人語」では、20世紀が人類史上最も平和を追求し実現して来た時代でもあり、次の時代にもこの平和を求めるところを引き継いでいくことの大切さが語られている。私たち近畿大学工学部は、原爆の投下された「広島」で、科学技術の発展に寄与するべく研究を推し進めている。科学技術はその用い方によっては、人類の繁栄にも破滅にもつながる。われわれが追求している技術が次世代の「平和」につながるように、2018年最も売れた本と、私の座右の書3冊を紹介し、2019年に科学技術を支える最先端の「こころ」について考えてみたい。

## 1. 自分の生き方は自分で決める！ 大人がこどもに伝えたいこと。

『漫画 君たちはどう生きるか 原作：吉野源三郎 漫画：羽賀翔一 マガジンハウス 2017.8.24』

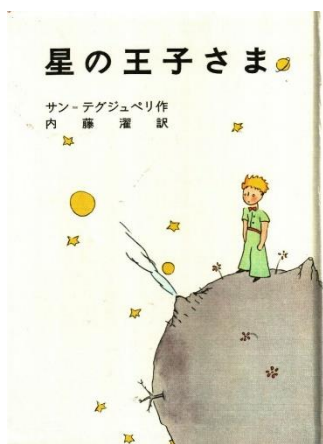


この本は、2018年上半期、下半期ともに売り上げ第一位で、年間を通して一番（207万部）売れた本だそう。思えば、2018年は店頭で常にこの本が並んでいたように思う。ジブリの宮崎駿監督も現在、この本のアニメ化を進めているようである。この本は、1937年（昭和12年）に編集者・児童文学者でもあった吉野源三郎によって書かれ、版元を変えながら現代まで読み継がれてきたものだ。2018年なぜこの本が、多くの人の心をひきつけたのか。このことを考えることが、2019年に考えることのヒントになる気がする。そのきっかけは、羽賀翔一によって漫画化されよりわかりやすくイメージしやすくなっていることが大きく関係していると思う。このことでとてもわかりやすく、若い世代でもすぐ読める内容になっていると思う。本書は、中学生であるコペル君に、大人であるおじさんが、生きていく上で大切なことを伝えていくものである。「ものの見方」「人間の結びつき」「人間の悩みと、過ちと、偉大さ」などについて、日常的生活と照らして描かれている。普遍的なものはいつも変わらないということ

を再認識させてくれると同時に、私は、むしろ大人が子供に大切なことを伝えるにはそうしたら良いかを考える本ではなかとと思う。宮崎駿監督も、大人が大事なことを子供に伝える必要性を強く感じアニメ化しているのではないかと。この本がベストセラーになるということは、世の中が物事の本質に向き合いたいし、それをどのようにすれば次世代に引き継ぐことができるのかを模索していることを示していると思う。

## 2. かんじんなことは目に見えない。大人を脱ぎ捨てて想像力を磨こう！

『星の王子さま 作：サン＝テグジュペリ 訳：内藤濯 岩波書店 1962.11.27』



現代社会は、結果がすべてだ。数字がすべてだといっているかもしれない。これは得られる成果を可視化するもので科学技術の基本でもある。でも本当にたいせつなもの「こころ」は目に見えない。さらに私たちは大人になるに従って、周りを気にして「こころ」にフィルターをかけ直感を信じなくなる。経験はこころを成長させるとこともあるが、気をつけないと本心を隠してしまい「想像力」を失ってしまう。それじゃダメなんだ！ このことを『星の王子さま』は教えてくれる。『星の王子さま』は1943年に英語版とフランス語版が刊行され、その後日本でも1962年に翻訳されるなど、世界中で長く広く愛され共感をよんでいる本であるといえる。可愛い挿絵でも有名で、読んだことはなくてもその絵をみたことはある人も多いと思う。大人になって読み返してみると、地球人として失ってはいけないとみんなが思っている大切なことに気づくことができ毎回ちがった発見がある。本書は、どこかの星から来た王子さまが、地球の砂漠で飛行機の操縦士と出会い、故郷の星のこと、いろいろな星を巡ったこと、地球で見聞きしたことや感じたことを語りながら、操縦士と心を通わせる物語だ。作者のサン＝テグジュペリ本人も飛行士であることか

ら、本書は著者自身の中にある大人と子供のこころの葛藤を描いたものだともされている。教育を受け経験を積んでりっぱな大人になったとしても、少年のような純粋なこころを常にもちつづけ「初心に立ち返ること」の大切さを示している。最先端技術が本当に人を豊かにし平和に繋がるものなのかを考える、何度も読み返す本だと思う。

### 3. 「暗がり」と「翳り（かげり）」の中に日本の美を見出そう。

『陰翳礼讃 文：谷崎潤一郎 写真：大川裕弘 パイ インターナショナル 2018.1.12』



建築の分野でも脈々と伝わる必読書があり、この谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』は、その中でも最も重要な書籍とされている。私も、大学1年生の時に先輩に進められて読んだ。さらに本書は、1933年（昭和8年）に谷崎潤一郎によって書かれた『陰翳礼讃』に、写真家の大川裕弘による美しい写真が添えられたフォトブックとなっており、文章だけではなかなかイメージできなかった内容も、大川氏の写真によってイメージしやすくなっているものである。『陰翳礼讃』は、1933年（昭和8年）当時の西洋化・近代化していく時代に、西洋と日本の生活文化を比較しながら、それまで日本人が大切にしてきた美意識について描かれたものである。その日本人が大切にしてきた美意識とは、「暗がり」と「翳り（かげり）」の中に美を見出そうとする意識であると、谷崎潤一郎は述べている。日本の空間はもともと「暗い」のだが、この暗さの中にも濃淡があり、その中に美を発見するといった精神だ。合理化近代化によって隅々まで明るい空間に暮らす現代人にとって、「暗がり」や「翳り（かげり）」は克服するものであり時代遅れに感じることもかもしれないが、しかしこの繊細な日本人的美意識は、これからの先端的な生活（豊かさや平和）を考える上で最も重要な感覚・精神であると思う。私は古民家の改修で、昔から大切にしてきた日本人の美意識（伝統）と近代化合理化し現代生活（先端）との共存を目指しているのだが、豊かさと平和の発展は「暗がり」と「翳り（かげり）」に美を発見する日本人的美意識にあることを、本書は教えてくれる。

### 4. 野生の力を取り戻し、自分の力でものをつくろう！

『野生の思考 著：クロード・レヴィ＝ストロース 訳：大橋保夫 みすず書房 1976.3.30』



私は7年ほど前に東京から東広島に移住してきた。自分の「野生の力」を呼び起こしたいと考えたことが、移住の大きな理由である。東京は、近代化し合理化が進んだ先端的な街だ。おしゃれで、便利で、かっこいい。お金さえ払えば、できないことは何もないと言えるかもしれない。みんなが憧れる東京に生まれ育ったから、なんだか鼻たかだかな気持ちもあったと思う。でも大人になるにつれてそれだけではつまらない気持ちになって来た。なにか飼いや慣らされ、自分の力でものをつくっている実感が薄れて来たと感じたのだと思う。だから僕は東京のカフェで「野生の思考」を読みながら、自分も豊かな自然の中に身を置いて、動物的感覚と言っていよいよ野生の力と呼び起こし、自らの力で（本心で）ものづくりをしたいと考えていた。今もその気持ちは変わっていない。本書は、先進国フランスで哲学を学んだクロード・レヴィ＝ストロースが、ブラジル奥地の先住民が住む土地に分け入り、未開社会における人間の考え方や行動を研究したものである。現代の科学的思考からしてみれば、未開社会での

人間の考え方は不完全で、野蛮で、非合理であるかのように見える。しかしそこには、人間が自然と対峙して暮らす本質が示されているのである。本書には、その「野生」と「科学」をつなぐ方法が書かれている。広島には、美しい海と山があり、多くの自然がある。そこでの人間の営みが残っている。この豊かな環境を活かして、自分の力で最先端のものづくりをみんなとしたいと思う。そのヒントがこの本に詰まっていると思う。